

インドネシアの残留日本兵【531号】

2023年 7月 石館

2023年6月、インドネシアを公式訪問された天皇皇后両陛下は20日午後、インドネシアの独立に貢献した政治家や軍人らを埋葬するカリバタ英雄墓地を訪れ、5本の竹やりをモチーフとした白い中央慰霊碑に供花された。



同墓地には戦後も現地に残留し、インドネシア人と共に独立戦争を戦った旧日本兵27人も眠る。

オランダの植民地であったインドネシアは戦時中の約3年半、旧日本軍に占領され、終戦後の45年に独立を宣言した。独立戦争は49年まで続いた。

独立戦争を生き抜いた日本人元兵士にはインドネシアによってゲリラ勲章が授与され、英雄墓地に埋葬される権利を得るが、本人が望まない場合や書類不備などの場合、一般墓地に埋葬される。

今回の天皇皇后のインドネシア訪問で同国の残留日本兵問題が脚光を浴びたが、残留日本兵は中国、インドネシア、ベトナム、タイなどにも多くいた。特にグアムの横井庄一氏、フィリピンの小野田寛郎氏などは大きく報道され日本人で知らない人がいないくらい有名になった。

残留日本兵とは、第二次世界大戦の終結に伴う現地除隊の後も日本へ帰国せず現地に残留した旧日本軍の将兵を指す。アジアや太平洋の各地に駐留した旧日本軍の将兵は1945年8月の終戦により現地で武装解除、除隊処分とされ、日本政府の引き上げ船などで日本に復員し帰国した。しかし、その一方で様々な事情から連合軍の占領下におかれた日本に戻らず、現地での残留や戦闘の継続を選んだ将兵も多数存在した。これらの事情としては；

- 1) 終戦を知らされず、あるいは信じず現地で潜伏し作戦行動を継続したものの
- 2) 第二次世界大戦後、欧米諸国の植民地に戻ったアジアの各地で勃興した独立運動に身を投じたもの
- 3) 市街地への空襲や原子爆弾による日本本土の惨状を伝え聞き、家族の生存や帰国後の生活を絶望視したり、復員船は撃沈されるというデマを信じたもの。
- 4) 日本で戦犯として裁かれることを恐れたもの
- 5) 現地語が出来たり、土地勘や地縁があり、復員するより現地社会で生きていくことを望み残留したもの
- 6) 技師やビジネスマンとしての才覚を買われ、現地政府の招聘を受け残ったもの

その他、多くの理由により日本本土への帰国を断念し、現地にて生活基盤を築くことになったこともある。



横井庄一 小野田寛郎 横井庄一伍長の
詳細全記録 週刊サンケイ ...

横井氏、小野田氏の場合はどちらかということ、上記1)のカテゴリに入ると思うが、横井氏の“恥ずかしながら生きながらえて帰ってきました”との帰国第一声は流行語にまでなった。

インドネシア残留日本兵のうち個人名まで判明しているのは903名。その多くが1942年3月から約3年半続いた日本軍のオランダ領東インド占領のために動員された若い下級兵士だった。

彼らが日本に復員しなかった理由は、自発的なものから強制的なものまでさまざまである。例えば富山上等兵は“インドネシア独立の大義に死す”ため、山口憲兵は“戦犯になって処刑されるのを恐れた”、小野田軍曹は“無条件降伏は受け入れがたい”など様々な理由があった。一方インドネシア側が残留日本兵を受け入れたのはなぜか。そこには日本軍の保有する兵器と人材を求める切実な事情が

あった。

インドネシアでは1945年8月17日に独立宣言がなされ共和国政府が発足するが、翌月には連合国を代表したイギリス軍が進駐し、各地で武力衝突が起き、独立戦争に発展する。

オランダ東インド会社が17世紀に現在のジャカルタに商館を設置して以来、インドネシアの島々はオランダの植民地として数百年間支配されていた。1942年1月、日本軍の侵攻により300年続いたオランダの植民地支配はあけなく崩壊した。日本軍は、オランダに捕らえられ流刑に処せられたスカルノやハッタなどの民族主義運動の指導者を開放。郷土防衛義勇軍を設立して軍事訓練を施し、将来のインドネシア独立への基礎を築いていった。



ポツダム宣言受諾から2日後の1945年8月17日、スカルノ氏邸に結集した訳1000名の立会いの下、インドネシア独立宣言を発表。スカルノが首班に指名されインドネシア共和国が成立した。

しかしオランダは独立を認めなかった。1947年7月、仲介役のイギリス軍がインドネシアから撤退すると、オランダ軍はインドネシアの主要拠点に軍事侵攻を開始。本格的なインドネシア独立戦争の火蓋が切って落とされた。戦闘には日本に引き揚げなかった元日本兵約3000人が加勢した。

旧日本軍部隊は連合国に押収されるはずの武器をインドネシアに横流しし、3万丁以上の歩兵銃、数百の野砲、軽戦車、トラック、軍刀などが独立派の手に渡った。12万人以上のオランダ軍を前に、旧日本兵の奮闘も及ばず、1948年12月にはインドネシア共和国の臨時首都ジョグジャカルタは陥落。スカルノ

大統領、ハッタ首相らは逮捕された。開戦から80万人以上のインドネシア国民が犠牲となり、1000人以上の旧日本兵も命を落とした。



存亡の危機に瀕したインドネシアだったが、国際世論はオランダを強く非難。国連安保理はスカルノ大統領らの釈放を決議すると、アメリカもオランダへの経済援助を停止。オランダは和平協議への強い外交的圧力をかけられていった。

インドネシア独立戦争に参加した元日本兵

1949年7月、スカルノ大統領らが解放されると、同年に

オランダの首都ハーグで開催された円卓会議の決議により、12月27日にはインドネシアの主権は連邦共和国に移譲された。1950年には連邦が解体され、同年8月、単一のインドネシア共和国の樹立が宣言された。ここに、インドネシアの独立は名実ともに現実のものとなった。

独立後、残留日本兵が歴史の舞台で日が当たることは無かった。日本では脱走兵とみなされ、インドネシアでも63年まで無国籍だった。95年に日本政府から両国の友好親善と相互理解への寄与について表彰され名誉を回復した。

14年に最後の一人が亡くなり、残留兵が連携や支援を目的に79年結成した“福祉友の会”は2世、3世に活動の中心が移っている。戦後の経済支援を通じインドネシアの親日感情は強まったと言われるが、しかし日本軍が占領統治で圧政を敷いた過去が清算されるわけではない。グローバルサウスの一員として台頭してくるインドネシアと互いに手を携えて発展できるとき、この礎を築いた残留日本兵が報われるときであろう。